

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 植 田 峰 悠

論 文 題 目

学生支援におけるピア・サポートの再考
—支援の対等性と相互性に着目して—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 鈴木健一
名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 松本真理子
名古屋大学心の発達支援研究実践センター准教授 杉岡正典

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文の題目は、論文審査受理段階では「ピア・サポートの視点から学生支援を捉えることの意義—学生相談機関の行う活動に着目して—」であった。しかし、その後の検討により、本論文で扱うべき主題をより明確にし、その主題に基づいて論を展開することが望ましく、そのためには題目の変更が不可避であるという理由により、本審査学位論文題目を「学生支援におけるピア・サポートの再考—支援の対等性と相互性に着目して—」とするものである。

本論文は、学生相談機関の行う活動に着目し、本研究において再定義されたピア・サポートの視点を用いて、学生支援にピア・サポートの視点を取り入れることの意義と、ピア・サポートの視点を取り入れた新たな学生支援のあり方について考察及び提言を行ったものである。

第1章では本研究の背景と目的が述べられており、「学生支援の3階層モデル（日本学生支援機構,2007）」に沿う形で学生支援及び学生相談機関の関与する活動についての現状と課題が述べられている。その後、近年学生支援を含む様々な領域で活動が展開されつつある「ピア・サポート」について現状を概観した上で、「相互性」と「対等性」を有する支援のあり方としてピア・サポートの再定義を行った。再定義されたピア・サポートとしての視点から個々の学生支援活動を振り返ることで、大学生によるピア・サポート活動（学生ピア・サポート活動）はあくまでもピア・サポートの形態に過ぎないことが示され、学生支援にピア・サポートの視点を取り入れることの意義と、ピア・サポートの視点を取り入れた新たな学生支援のあり方について検討することの必要性が指摘された。

第2章では、大学生ピア・サポーターの活動継続要因について調査及び検討を行い、彼らにとっての成長の実感と、他者支援の機会が活動の継続に関与していることを報告している。学生ピア・サポート活動が学生自身にとっての成長促進的役割を担っている結果が示される一方で、先行研究でも多く指摘されている大学全体への波及の難しさも改めて浮き彫りとなった。

第3章では、学生支援の専門家である学生相談カウンセラーを対象とし、学生支援の提供者自身のピア・サポートのあり方が論じられた。その結果、学生相談カウンセラーはその職務に際し様々な「一人では解決が難しい」と感じる状況を経験していることが明らかになり、学生相談活動は職務環境という土台に根差し、学生相談に期待される役割という軸のもと、組織的な連携・協働を展開していくという学生相談活動のモデルが提示された。また、学生相談カウンセラーへの支援のあり方としては、組織として、一個人として、情報としてのサポートのほか、それらに跨る包括的なピア・サポートとしての「カウンセラー同士のネットワーク」が存在することが指摘された。

論文審査の結果の要旨

第4章では、個別の学生相談事例を通してカウンセラーと学生とのピア・サポートという視点から日常の学生相談活動の展開を捉え直す試みが行われた。その結果、学生相談カウンセラーは修学上の支援や進路に関する情報提供、カウンセリングなど、様々な関与モデルに基づく支援者として CI とかかわってゆく中で、学生自身の体験を一人の人間として共有し、感じたことを互いに語り合うという対等で相互的なピア・サポートが少しずつ展開されてゆくようになり、面接が進むほどその役割は重要性を増していった過程が示された。その事実を踏まえ、本事例における学生相談カウンセラーとの関係が学生にとってのピア・サポートのモデルとして内在化されていった関係性の発達過程として理解できることが報告された。

第5章では、総合考察が行われた。学生ピア・サポート活動や学生相談活動を通じ、大学生にピア・サポートの発達を援助しうる可能性についても論じ、「支える」から「支え合う」ことを前提とした学生支援のピア・サポートモデルへの変革が今後の学生支援に求められていることが提言された。

本論文の特色と学術的意義としては、以下の点が挙げられる。

- (1) 対等性と相互性の視点からピア・サポートを再定義することによって、支援することとされることは一体であることを示し、現実的かつ有効な学生支援のあり方を提言したこと。
- (2) 学生相談場面においてカウンセラーは学生を支えつつ、自身も支えられているという対等かつ相互的な関係性の展開を明らかにしたこと。
- (3) ピア・サポートの視点を取り入れることによって、学生と学生相談カウンセラーの両者が活動の視野を広げることが可能とし、個としても成長し得ること。

本論文の研究成果は学生支援の枠組みに留まらず、支援の提供者と受け手の関係性を見直すものであり、心理臨床そのもののあり方に対して重要な知見を提供している。

本論文に対して、審査委員からは以下の疑問点、問題点が指摘された。

- (1) ピア・サポートを再定義する上で対等性と相互性が重要な概念になっているが、対等性と相互性の定義を精緻に検討する必要があるのではないか。
- (2) ピア・サポートを再定義したことによって、ピア（仲間）という概念そのものの意味合いが変化していないか。ピアはどのように捉えられ得るのか。
- (3) 対等性と相互性は人間存在に関わる視点であるが、なぜピア・サポートという概念で再構成する必要があるのか。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は、研究の限界や課題についても十分認識しており、質疑に対する回答も、適切かつ妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。